

形あるもの・秩序あるものは、いつかは崩れる

「ヒトはなぜ老いるのか」をテーマに、分子生物学者へのインタビューと解説、そして老いを主症状とする難病の子どもたちの事例を取り上げたドキュメンタリー番組を見た。

ヒトは一つの受精卵の細胞が、細胞分裂を繰り返して成人では60兆の細胞から成り立っている。

分子生物学から見ると、生命の基本単位であるヒトの細胞内の分子は、常に再生・消滅を繰り返して一年前の自分の細胞はすっかり入れ替わって別人だといえなくもないという。

食べた物は体内で吸収され栄養とエネルギーになると考えられていたが、分子レベルでは、食べた物（分子）は体の隅々の細胞に行き渡っている、つまり、細胞の分子は絶え間なく入れ替わっている（動的平衡）とか。

排出物（大便）は栄養素の吸収後のカスと考えられていたが、実はその40%は入れ替わった古い細胞や分子であることが分かってきたとか。

また、その細胞が再生されるということは、DNAのコピーが行われているということでもあるようで、

細胞の分子レベルの動的平衡が調和されている時はいいが、この平衡が崩れ古い分子が排斥されずに細胞内に貯まり新しい細胞（分子）が再生され難くなるのが、老化ということに繋がるという。

細胞であれ動的平衡であれ、形あるもの、秩序あるものは、時間経過と共にいつかは崩れるのは宇宙の大原則とか。

一方、細胞の分子レベルでは、活発に再生される細胞をバランスよく押さえる働きもあるが、このバランスが崩れ要らぬ細胞が増殖することがガンと説明できるよう。日本人の死因の第一位はガンであるが、寿命が延びたということは動的平衡の過程でDNAのコピーミスが起こる確率も増え、必然的に要らぬ細胞が増殖するガンになる確率が高くなるということのよう。

また、子どもの頃や若い頃に何らかの原因でこの動的平衡が崩れることが多くの難病の原因でないかと推測でき、ミスを起こすDNAの解明こそが難病治療への第一歩のよう。

上記は番組を見ての理解不足も多いと思うが、「老いる」というヒトという生物のもつ自然の摂理とかメカニズムが、何となく分かったような気がする。

歳を重ねる「老い」は「ヒト」の自然の摂理である以上、それをどう受け止めどう向き合うかは、「人」という自分の意識の持ち方ということか…。